

# 12月4日 白木地区 集会に参加して ムダ、ムリ、無謀 もんじゅを動かしてはならない

久保 良夫

高速増殖炉原型炉の「もんじゅ」のある白木地区は、冬の海を代表する「海鳴り」が襲う。

私たちは、11時の現地の集会に間に合うように午前7時に拙宅を乗用車で出発する。

前日の強風は過ぎ去り、穏やかな朝日を浴びていた。しかし、敦賀を通過すると(今のもんじゅを象徴するかのように)とたんに天候は悪化した。

土曜日の朝というので、比較的高速道路はスイスイと進み、3時間足らずで目的地白木に到着した。思ったより順調で安堵した。

その途中、関電の美浜原発を通り過ぎた所で検問に出会った。

私たちの車を止めた警官が、「この先で、もんじゅの集会があるのですが」と問うので、わたしは「そのもんじゅの集会に行きます」と、きっぱり答えると、「免許証と、後ろを開けてくれ」と要求をしてきた。(なんでやねん!)と思いつつ、素直に応じてしまう。少し自分のすなおさに腹が立つ。

## 浜辺での現地集会

白木地区にバスが次々と駐車場に到着。

石川、富山、大阪、奈良からと、そして全国各地から続々と……。集会の参加者は、800人にも上った。海岸べりでの集会が始まる。



〔白木地区の浜辺での集会参加者〕



〔高波が襲うもんじゅ〕

15年もの間、運転停止していたもんじゅを生き返らせるために、なんと1日5500万円もの税金を使い続けた。そのもんじゅが、この5月に運転を再開した。しかし、8月末に重さ3.3トンの炉内中継装置を原子炉内に落下させてしまい、いまだに停止したままとなっている。この事実の暴露、怒りを込めての報告が続く。ムリ、ムダ、ムボウなもんじゅを告発する集会であった。

印象に残ったのは、日本原子力研究開発機構は、11月17日に「炉内中継装置を外枠ごと一緒に引き抜く」と発表したが、実現不可能な難作業であること。「この先、また何年もの月日と、途方もない多額の税金を使うことになるもんじゅを廃炉にしなければならない」と、力強く訴え、これからの闘いの強化、闘いの継続を確認しあう場面。

久しぶりに早めに集会に参加したので、いろんな方とあいさつができた。京都の佐伯さんは、軽い会釈で、昼からの司会役だと。大阪の末田さんは、毎年の浜辺での集会場所が、今年に変更になったこと。若狭の石地さんは、新聞折り込み基金のお礼と、折り込みがだんだんしずらくなってきたことなど。名古屋の村上さんは、自分が運転手となり、名古屋の人と共に参加したこと。美浜の松下さん

とは、11月30日に美浜町内に「森の国から」の新聞折り込みをしたこと。昼からの屋内集会でも池野さん、山崎さん、敦賀の杉原さんなどなど、中には久しぶりにお会いした人もあり、再開で心強さを感じた。

### もんじゅ前で抗議文を手渡す



海岸での集会後、坂道を上り、もんじゅゲート前に、シュプレヒコールを上げながら集結した。

警察側は、「ゲート前では流れ解散を」と指示する拡声を後ろに聞きながら、毎年恒例の抗議文の手渡し行動となった。

しかし、そのとき、一人の参加者が突然路上に倒れた。集会主催者が、「お医者さん、看護師さんはおられますか」と、マイクで訴える。警察がわは、あわてて毛布をもって来るなど、救急車が到着するまで待つということになった。

わたしは、思わず「もんじゅ内にも医務室はあるやろ、人が倒れているから中に入れろ」と、叫んでしまった。白木まで救急車が来るのに20分かかるとい話を聞いたので、もんじゅ内にも救急処置ができる部屋があると思ったからだ。やがて、封鎖されていたゲートが開かれ、中から救急車が登場したのである。そのとき、驚くべきことに二人目の人が倒れ、二人とも救急車に乗せられるという事態となった。緊急時に機敏に的確に対応しなければならぬ「もんじゅ」であるが、ここで人が倒れてもすぐに対応できないことを露呈してしまう瞬間であった。もちろん、

「機構」側から見れば、敵対する人が倒れても「厄介者」としか考えていないだろうから、即座に対応しなかったのかもしれないが、…。

### 午後からもんじゅ廃炉を求める全国集会



昼食後、敦賀市内のプラザ万象の集会場に結集した。参加者は少し増えて、850人にのぼった。

原子力発電に反対する福井県民会議の小木曾さんは、迫力ある口調で報告をした。内容は以下にかかげる。

- ① 再開したけれど、身動きとれず
- ② 原子力機構は再生不能の組織体質
- ③ 事故の重大性の認識に欠ける
- ④ 「もんじゅを終わりに」では、落下物の回収作業の監視、もんじゅの公開討論会の再開、世論の喚起、世界の流れを拓ける、プルトニウム政策の転換、原子力に依存しない地域の再生などの運動を強めることを訴えた。

青森県反核実行委員会から、六カ所再処理工場を巡る現状報告があり、ストップ！プルサーマル・北陸ネットワークからは、「プルトニウム利用にNOを」、6月には、能登原発1号プルサーマル実施事前了解願提出の動きがあったが、反対して闘う報告があった。

環境ジャーナリストの鈴木さんは、「海外の主流は高速増殖炉からの撤退」、「海外の運転中・計画中の高速増殖炉は非現実的」、「莫大なプルトニウムあまり」、「『コスト・害・危険』増大サイクル路線から脱却すべきだ」と訴えられた。

最後に小林圭二さんは、「もんじゅ」最終章と題して講演を行った。今回の事故は「もんじゅ」に引導を渡す事故であり、ますます高速増殖炉の難しさを明らかにし、1兆3千億円ものムダな金食い虫である、もんじゅは高速増殖炉の実用化とは関係がないし、消費した量以上の燃料を生み出す増殖は幻想であった、世界は撤退をしている、と。そして、「世界でただ一国開発を続けている日本も終焉は近いでしょう。しかし、黙っていてもズルズル破局に向かいます。廃炉に向けがんばりましょう」と、締めくくられた。やはり闘いを大きなうねりとして拡大しなければ止めることはできないでしょう。

### 敦賀市中行進



集会場に結集した850人の参加者は、プラザ万象から、敦賀市駅まで隊列を組んで「もんじゅ廃炉」を訴え行進をした。

もんじゅのこの間のトラブル・事故を見ると、国、電力、機構が「高速増殖炉の実用化をめざして研究開発を進める」と推進の大宣伝をして

も、技術的に極めて困難であり、試運転の目処すら立たない状態なのである。今回は技術的に基本中の基本ができていないというレベルの事故なのだが、政府からこんな「機構」に任せておけないとの声は未だに出てこず、危機意識が全くない。もんじゅを動かせば、重大事故が起こり、大量の放射能放出による悲惨な放射能災害が避けられない。もんじゅ自らがうごかすな！と悲鳴を上げているのに。

菅内閣は、もんじゅの問題をリアルに認識し、国会で真摯に話し合っ、今こそエネルギー政策を転換すべきである。しかし、政権民主党も最大野党の自民党も「もんじゅ」からなにも学ぼうとしていない。

もんじゅ廃炉と「機構」組織の解散が求められているのに、国は、「もんじゅに約200億円もの予算」を今年に引き続き計上し、研究を存続させるというありさまである。税金のムダ使いである「もんじゅ」、技術力でコントロールできない「もんじゅ」。

勇気を持って撤退すべきだ。

「国のエネルギー政策の転換！を。」ますます中央での闘争が不可欠となっている。

「もんじゅ」まやかし公開ヒアリング阻止の1万人行動に参加した自分としては、叫びたい。「動かせば重大事故、社会破滅につながる『もんじゅ』を止めよう！」と。

悲壮感を持って突き進みたいという望みが強いのだが、なぜか、ふーっとある空しさが脳裏をかすめるのは、私だけなのであろうか。